



すが、これは本当に面白かったです。

その後、滞在の終わりには研究発表を行う予定でしたので、その日に向けて、日本語でレポートの準備をしました。日本語の使い方について、チューターが色々アドバイスをしてくださいました。チューターの専門は、イギリス文学史でしたので、日本の音楽産業について私に説明するのは、とても難しかったかも知れません。ですが、なんとか二人で協力しながら、発表に向けて準備をしました。研究発表は無事終わり、先生方からは、研究の良かった点や、アドバイス等をいただきました。

私は滞在期間中、日本コロムビア社の方々をはじめ、たくさんの人に会いました。非文字資料研究センターでも、同時期に来ていた韓国と中国からの訪問研究員の方々にもお会いしました。その方々の研究内容も興味深く、お話をするのは楽しかったです。滞在した寮の管理人の方や、その他、たくさんの方々にお世話になりました。最後に、この機会を与えてくださった非文字資料研究センターの皆様、先生方、チューター、お会いした皆様方に、感謝の気持ちを表したいと思います。

秀吉のお城を巡って



鄭潔西
(浙江工商大学東亜文化研究院)

私は2013年1月7日から3週間、招聘研究員として神奈川大学非文字資料研究センターを訪問し、様々な資料収集と実地調査を行った。私の研究テーマは「『朝鮮日本図説』にみる豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争」である。

周知のように、秀吉の朝鮮侵略戦争(1592～1593)のような歴史事件に対しては、これまでの研究のほとんどは文献資料を中心に進められてきた。ところが、戦争に関する資料は、必ずしも文字により記録された文献資料とは限らない。図像などの非文字資料が文献資料と比べ量的には極めて希少でありながら、歴史を写實的に描いてより直感的に、より分かりやすく歴史を物語ってくれるのは、なかなか興味深いことだと思われる。

秀吉の朝鮮侵略戦争に関する図像資料は、日本と韓国には多数残されている。よく知られているのは、「釜山鎮・東萊府殉節図」(朝鮮国製作、韓国陸軍博物館所蔵)、「朝鮮軍陣図屏風」(日本国製作、鍋島報效会所蔵)、「朝鮮蔚山合戦之図」(日本国製作、前田育徳会尊経閣文庫所蔵)、「平壤城攻防図屏風」(朝鮮国製作、韓国国立中央博物館所蔵)、「壬辰倭乱図屏風」(朝鮮国製作、和歌山県立博物館所蔵)などの屏風図である。当時の中国人が製作した図像資料で、これまで紹介されたのは、「征倭紀功図巻」(個人所有、所蔵不明、写真有り)の一種しかないのである。

私の今回の研究対象は『朝鮮日本図説』という最近中国の国家図書館で発見した新資料である。当該図説には、1597～1598年の戦役期に朝鮮南部にある日本侵略軍

の倭寨図(倭城図)が19箇所が描かれている。この図説は、上掲の屏風図と「征倭紀功図巻」のような絵巻と異なり、木版印刷による印刷書である。このような印刷書は、短時間に大量印刷が可能であるが、絵巻に比べその画像の画質は大幅に低減した。ところが、この図説は著者が戦争直後に自ら朝鮮南部の各倭城に入城し詳細に検視したことが明記され、実測によって作られた可能性が高く、その写実性は無視できない。また、『朝鮮日本図説』の刊行趣旨は明朝の海上の安全を確保するという点にあることから、終戦直後の当時、明朝に対して日本からの脅威はまだ続いていたことが分かる。この図説は朝鮮南部の倭城の全体性が強調され、対日本の軍事書として認識すべきだと思われる。

訪問期間中、私は神奈川大学校内の図書館や各図書室はもちろん、国立国会図書館、国立公文書館、東洋文庫、蓬左文庫などの図書館の資料を存分に利用でき、また、ほぼ同じ時期に建築された小田原城、名古屋城を巡って、実地調査を行った。そして、訪問研究期間が終わった後も日本に残り、秀吉の朝鮮侵略の前線基地として築かれた九州の名護



屋城にも赴いたのだが、名護屋城に着いたとたんに俄雨が降りだし、そして名護屋城博物館は耐震工事のために臨時休館となっており、案内をしてくれた友人と私以外、

誰もいなかった。ゆっくりと名護屋城跡を巡ろうと思っていた私は、その展開に、ある奇妙な思いを抱いた。

「日本を観る」から「日本を感じる」へ

韓 男洙
(漢陽大学校)



1月9日、私は初めて日本の横浜市神奈川大学にある非文字資料研究センターを訪れていた。その日の午後は、宿舎にスーツケースを置いてすぐにセンターの資料室へと向かった。資料で埋め尽くされたその部屋から醸し出される独特な香りと、収集された資料の保管方法は、そこを訪れる者に一種の目新しさと驚きを感じさせるものだった。私の中で、これこそ文字に非ざる資料を扱う研究センターの学術的な態度と性格とを示すものであるという感覚がひしひしと湧き上がってきた。これら資料室に納められた韓国や中国、そして日本に関する豊富な民俗資料を目の前にして、それまでの疲れも一気に吹き飛んでしまうほどだった。

私はこれまでに3度、日本を訪れたことがある。いずれも、調査を主目的としたものだったが、今回は初の一人での渡日となった。可能な限り多くのものを見てみたいという思いから、滞在スケジュールはタイトに組むことにした。そのため、日本でのフィールドワークを進めるうちに、自分の体力不足を痛感させられることになった。一方で、まったく馴染みのない土地へ行き、きわめて新鮮な事柄に触れることができたことで、毎回、疲れが一瞬で吹き飛んでしまうような心持ちになった。今回の滞在中、私は12カ所に及ぶ場所を訪れ、日本各地の民俗文化を体験することができた。ここに、その内訳を列挙してみよう。電車に乗り、都会のど真ん中や市場まで出かけたり、村に暮らす日本人のもとを訪ねたりしたほか、博物館や画廊、オペラや伝統的な演劇を見学したり、公園や神社を訪れたりすることもあった。ほかには、大磯の左義長（以前は神社で行われていたとされる厄払いの儀礼）や三浦のチャッキラコ（幼い子供たちの踊り。子供たちは鈴と稲穂をつけた竹を手を持って舞う）を見学する機会にも恵まれ、さらには名古屋まで足を伸ばして日本独楽博物館を訪問することもあった。これらの地で目にした様々な情景は、私の頭と心の中にしっかりと

刻み込まれている。だが、何よりも重要なのは、私の中で起こった「日本を観る」から「日本を感じる」へという感覚の変化だった。日本に来て触れた忘れがたい情景と雰囲気が、自ずと日本を受け入れ、そこから何かを感じ取るという方向へと、日本に不慣れな一人の観光客だった私を導いてくれたのだろう。

國學院大学は、私が今回調査のために訪れた一つ目の場所だった。ここでは、江戸時代の神社がどのようなものであったのか、その形式を一目で理解することができた。とりわけ、樹木の葉の形をした祭祀儀礼用の杯はきわめて精巧かつ精緻に作られており、それは神社の祭祀儀礼が定められた類型と式次第、規模といったものに基づいて行われていることを伺わせるに足るものであった。また、祭祀儀礼に用いられる白い冊子は「浄化」を象徴するものようで、別の機会に訪れたいくつかの祭祀の中でもその意味を再確認することになった。

今回の調査で特に印象深かったものとして、天候と人々の姿を挙げることができるだろう。天候といえば、大磯で行われた左義長に触れぬわけにはいかない。1月14日は、大雪の降った日である。私は朝の10時には現地に到着したのだが、すでに強風とかなりの量の雪が降っていた。問題は、強い風のせいで足を一步前に踏み出すのも困難なことだった。わずか200メートルばかりの短い距離を歩くのに、1時間余りの時間を費やしたような気がするほどだった。こうして、やっとの思いで海岸へと向かい、そこに設けられた9つのサイト（ワラでできた山。この中には旧年中に使っていた神棚のかざりやだるまが詰め込まれている）を目にすることができたのだ。砂浜を一步一步進むうち、しばらくすると例えようなない不気味な恐怖感が私を襲い始めた。今までにこのような天候の中でフィールドワークをしたことなどあるはずもなく、緊張から全身が強張っていくのがわかった。しかし、そこで前に進むのをやめたら、ぬかるんだ